

OF-3

肺がん薬物療法の進歩—分子標的薬剤と免疫チェックポイント阻害剤—

宮 敏路（杏林大学・呼吸器外科）

肺がんの薬物療法は、分子標的薬剤と免疫チェックポイント阻害剤の登場によってめざましく変貌しました。進行した肺がんは、これまで「治らない癌」の代表と言われてきましたが、遺伝子研究によって薬物療法が進歩し、長期の治療効果が期待できるようになっています。

分子標的薬剤はこれまでの抗がん剤とは異なり、正常細胞には存在しない、がん細胞に特有の分子構造を標的としています。そのため、吐き気や脱毛などの副作用が少なく、がんの遺伝子情報にあわせた薬剤を選択することによって個別化治療を行い、大きな効果を上げることができるようになりました。肺がん細胞表面にある「上皮増殖因子受容体」に作用するチロシンキナーゼ阻害剤は分子標的治療の代表的薬剤です。さらに、2種類以上の分子標的薬剤の組み合わせや抗がん剤との併用療法などの臨床試験が行われ、より優れた治療効果が報告されています。

免疫チェックポイント阻害剤は、これまでの免疫学の常識をくつがえす画期的な発見です。がん細胞はPD-L1という特殊なタンパク質を細胞表面にもっており、この働きによって免疫細胞による攻撃を逃れています。免疫チェックポイント阻害剤はこの「免疫のブレーキ」をはずすことによって生来もっている免疫力を活発化させ、がん治療を行うものです。この新しい治療法の研究に2018年のノーベル医学・生理学賞が贈られました。

分子標的薬剤、免疫チェックポイント阻害剤が利用できる現在でも、従来の抗がん剤の役割がなくなったわけではありません。分子標的薬剤や免疫チェックポイント阻害剤も万能薬ではなく、それぞれの病状にあわせて最適な治療方法を選択する必要があります。医療者を含め、多くの方が「抗がん剤には強い副作用がありQOL（生活の質）を悪化させる」と考えているようですが、それは標準的治療について十分な情報を得ていないための誤解だと思います。抗がん剤化学療法はQOLの悪化と引き替えに延命効果を得る治療ではありません。副作用対策が進歩した現在では、延命効果も得られ、かつQOLも改善する治療と位置づけられ、肺がんでも推奨される治療と考えられています。今回の講演では、抗がん剤、分子標的薬剤、免疫チェックポイント阻害剤の効用について概説したいと思います。